

令和2年度 学校自己評価書	学校園番号	学校園名	印	404	済美小学校	404済美小学校
	404	済美小学校				

大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善策
I 教育活動に関するもの	(1) 教育目標・教育計画	① 教育計画の作成	昨年度の反省及び教育目標をもとに、話し合っ教育計画を立てる。	各領域から教育計画が提案され、会議や研修の時間に話し合った。今年度は感染症対策のため、計画通りにいかないことも多かったがその都度修正し、すすめることができた。	A	職員1 肯定的100% A=69%	今年度のうちに反省をい、来年度の方向性を十分話し合っおく必要がある。
		② 教育活動の評価	各取組ごとに課題や成果を出し合い、次の取組に役立てていく。	各行事ごとに反省を出し合うと共に、12月には児童・保護者・職員にアンケートをとり自己評価を行った。		職員3 肯定的100% A=71%	授業時数が減った中での今年度の教育活動の評価を丁寧に行う。もっと時間をかけなければならないこと、今までより少ない時間でも成果があがっているものなど。
	(2) 教科指導	① 学習指導計画の立案	各教科の年間計画・評価規準の見直しをしている。	本年度から新学習指導要領が完全実施になったことにあわせ、年間計画の見直しを図った。しかし、評価の観点についても変更があったが、評価の検討については研修機会を設けることができなかった。	A	職員2⇒肯定的100% A69%	来年度は年間指導計画の周知徹底、カリキュラムマネジメントの視点をいれた計画の見直しを図る。
		② 指導方法の工夫改善	各教科において研究主題「深い学び」につながる言語活動の充実～子どもたちの思考をつなぐ指導言の研究～に重点を置いた指導方法を工夫している。	本年度は3回の研究授業・協議を実施し、研究主題についての研修を図った。毎年、教員が入れ替わる中、本校として目指すべき授業像を確認できた。		児童1⇒90%・3⇒61%・4⇒83%・6⇒96% 職員4⇒肯定的100%,A79% 保護者2⇒92%・4⇒92%・5⇒90%	来年度は研究授業・協議を六回に増やし、より見識が深められるよう、研修計画を立てる。
		③ 評価	客観的で妥当性のある評価規準の見直しと評価方法の工夫をしている。	新学習指導要領の完全実施にともない評価規準も3観点に変更となった。各学年で各評価規準についての検討を行った。しかし、研修機会を設けることができなかった。		児童7⇒94% 保護者7⇒98% 職員7⇒肯定的100%,A62% 職員8⇒肯定的93%,A62%	新評価規準の研修を持つ。また、各学年、学年部で評価規準について話し合う時間を設けるようにする。
	(3) 道徳教育	① 全体計画の立案	「心豊かな子を育てる」ために、年間計画を作り、必要に応じ、見直しをしている。	道徳の教科書を中心に各学年で年間計画を立てることができ、指導することができた。	B	年度当初に各学年の年間指導計画を作成した。	道徳科の年間指導計画や、各教科の指導において道徳教育として効果的であった単元等を追記していくなど、計画の改善・充実を図っていく必要がある。
		② 指導方法の工夫改善	5つの道徳教育目標に重点を置いた指導方法を工夫している。	公開授業及び事後研修を2回行う事ができた。ワークシートを活用し、自分の学びを振り返ることができるよう工夫して取り組むことができた。		職員13⇒肯定的な意見:100%(A:59% 職53⇒肯定的な意見:100%、(A50%)	児童の実態と合わせながらより良い指導方法について追究していきたい。
	(4) 特別活動	① 学級活動・学級経営	「自ら学び、心豊かにたくましく未来を切り拓く済美の子」を教育目標に掲げ、学級経営をもとに、話し合い活動や自主的活動を取り入れ工夫している。	各学年や学級で目標を設定し、それに向けて継続的に指導を行った。	B	児童9⇒肯定的な意見71% 児童11⇒肯定的な意見92% 児童18⇒肯定的な意見98%	自分の考えを伝えることができたと感じている児童の割合が少ない。そのため、学級活動や教科学習の中で、対話力を高めていく必要がある。
		② 学校行事	全校または、学年を単位として年間計画を立てている。魅力ある学校行事を創造している。	コロナウイルス感染症を考慮し、状況に応じて指導計画を学期ごとに考えて、学校全体や学年で行える行事を、意欲的に取り組めるよう指導した。		児童10⇒肯定的な意見92% 職員14⇒肯定的な意見93% うちA=52% 保護者9⇒肯定的な意見85% うちA=33%	コロナ禍のために活動が制限された。今後も感染対策を考えながら、魅力ある学校行事について考えていかなければならない。
		③ 児童・生徒会活動の活性化	学校生活をより楽しく豊かなものにするために、自主的に活動させたり、意欲的に活動させたりしている。	児童が協力してそれぞれの仕事に責任をもって取り組めるように、縦割り活動や委員会活動などを工夫した。		児童11⇒肯定的な意見92% 職員15⇒肯定的な意見100% うちA79%	児童が自主的に活動していると感じており、職員もそれをしっかりと支援することができていた。
		④ クラブ・部活動の活性化	共通の興味・関心を追求し、仲間とともに協力して楽しい活動になるように活動内容を工夫している。	異学年集団で協力しながら、共通の興味・関心を追及して楽しく取り組むことができた。		児童12⇒肯定的な意見92% 職員16⇒肯定的な意見97% うちA=45%	クラブの種類が児童の希望に即していない部分も見られるため、今後もアンケートを取り、現有クラブの再考をしていく必要がある。
	(5) 総合的な学習の時間の指導	① 学習指導計画の立案	学習内容と年間計画の立案ができている。	各学年でテーマ及び指導計画を検討・立案し、取り組むことができた。	A	肯定的な意見 職員2⇒100% うちA=69%	3～6年の時間数が70時間になったため、今年度の学習活動を振り返り、さらに精選・検討して、来年度の学習指導計画を立案していく必要がある。
		② 学習内容の精選	課題解決の学習をするための学習内容の精選をしている。	児童が主体的に取り組めると思える学習内容を検討し、取り組んだ。		肯定的な意見 職員17⇒100% うちA=63%	今後も学習内容を検討し、さらに児童が主体的に活動できるような取組を構築していく。
		③ 指導方法の工夫改善	世界遺産を切り口とした地域学習を充実している。	せいびの町や奈良の町に愛着と誇りをもてるよう指導方法を工夫・改善を図りながら取り組んだ。		肯定的な意見 児童13⇒93%・保護者10⇒81% うちA=32%・職員18⇒100% うちA=55%	地域教材の開発を進めているが、今年度は十分な時間を確保することができなかった。保護者参観やHP等で世界遺産学習・地域学習の成果を発信するような場も設定することが必要である。
		④ 評価	評価規準を設定している。	設定した評価基準を活用して指導に生かすよう取組を進めた。		肯定的な意見 職員7⇒100% うちA62%・職員8⇒93% うちA=62%	年間計画を作成する際に、目標や評価規準について、十分検討していく。さらに、活動ごとに目標や評価規準と照らし合わせながら、児童の変容を見取っていくことが必要である。
	(6) 人権教育	① 人権教育推進計画の立案	課題に焦点を当てた人権教育推進計画を立案している。	昨年度の実践を元に、推進計画を立案することができた。児童の課題を元に重点目標を設定し、それを達成するための取組を行った。	B	職員19⇒肯定的な意見97% うちA=55%	人権推進計画の見直しをしっかりと行い、今年度中に来年度に向けて課題を確認しておく。
		② 学習内容の精選	人権を尊重し、質の高いなかま集団を目指すための教材を選定している。	本年度の重点を「なかまづくり～伝えあおう みとめあおう つながろう～」とし、「人権を確かめ合う日」を中心に学校全体や学年の中で質の高いなかま集団を目指す取組を行った。		肯定的な意見 児童14⇒92% 児童15⇒95% 保護者12⇒97% うちA=50% 職員20⇒97% うちA=52%	人権を確かめ合う日の取組、ハッピー済美っ子の取組について、本年度の取組を元により良い形を考えていく必要がある。
		③ 指導方法の工夫改善	発達段階に応じた学習展開の工夫をしている。	子ども達どうしの関わりの中で生じる課題を元に学習を展開することができた。学期ごとに、自分・相手・周りの人の頑張り目に目を向ける活動を行うことができた。		肯定的な意見 児童16⇒84% 保護者13⇒90% うちA=40% 職員22⇒86% うちA=46% 職員23⇒97% うちA=69%	子どもの様子を観察し、課題をしっかりと把握して取組につなげていく必要がある。今年度は、講師を招いての人権研修ができなかったため、社会情勢や本校の実態なども鑑みて職員研修を行っていく必要がある。
		④ 理解と啓発	学校だよりや学年だよりで発信したり、人権参観や学級懇談会などの機会を設けたりすることで、本校の人権教育についての情報を発信している。	人権教育の取組について、参観や懇談、便りなどを通して情報を発信することができた。		肯定的な意見 保護者11⇒93% うちA=36% 職員21⇒89% うちA=41%	人権参観だけでなく、毎月行っている人権を確かめ合う日の取組やそれに対する児童の反応など、学校全体で行っている取組についても、保護者や地域の発信していく必要がある。

令和2年度 学校自己評価書

404

済美小学校

印

404済美小学校

大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善策	
I 教育活動に関するもの	(7) 生徒指導	① 組織的な生徒指導(校内・校外・小中連携)	生徒指導部会を毎月1回以上開催し、現状認識、課題等について共通理解した上で、全員で指導に当たる。また、各学年においても情報の共有をはかり、積極的な生徒指導に役立てる。低・中・高学年部を形成し各学年部の長に情報が集まる体制をつくる。	定期的に生徒指導部会を開催し、問題事象の共有を図り、共有した情報を各学年、各学級の生徒指導に役立てることができた。また、学年主任に情報が集まる体制を確立したことで、初期対応を適切に行うことができた。	B	・定期的な生徒指導部会の開催 ・情報共有の体制の構築 ・初期対応の正確性	生徒指導部が中心となり指導方針を打ち出すが、一過性のもとなっているため、継続して指導し続ける必要がある。生徒指導通信等、職員への周知方法の改善を図りたい。	
		② 問題行動の予防と指導	全児童が守るべき基本的なルールを明確に示し、全教職員が共通理解の上、一貫性のある、統一した指導を行う。生徒指導対応マニュアルの基づき、情報を収集し、学年部の長の指示のもと指導を行う。	職員朝礼、終礼、生徒指導部会など職員が集まる場で、学校の現状について気になる点を出し合い、職員が共通した問題意識をもって指導を行うことができた。また、曖昧になりやすいルールについては目に見える形で掲示し、児童自らが判断できる環境を整えることができた。		B	・指導の通りやすさ ・児童の生活の様子 ・問題事象への一貫した対応	決まりを守る理由が児童の中に強く根付いていないと感じる場面が見られることがある。生徒指導部を中心に有効な指導についての手立てを協議し直す必要がある。
		③ 教育相談・児童生徒理解	毎月の生徒指導部会において、各学年で共有化された情報をを集約し、児童理解につとめ、必要に応じて相談や指導を行う。毎月のアンケートをもとに子どもと面談を持つ時間をとって児童理解につなげる。	毎学期のアンケートをもとに、学年内で共有した情報を生徒指導部会や教育相談部会に報告することで、個々のニーズに合わせた支援を円滑に行える体制を整えることができた。		B	・定期的なアンケートの実施 ・他の部会との連携状況	校内の担当のみが専門的な知識を身につけるのではなく、職員全体で専門知識も含め具体的な対応方策を研修を通して身につけておく必要がある。
		④ 家庭・地域との連携	必要に応じて家庭と連絡を取り、保護者と共通理解を図りながら指導している。また、少年指導協議会等で、必要に応じて地域・保護者と情報を共有する。	些細な出来事でも家庭連絡を図り、学校と家庭で児童を見守り続ける体制を築くことができた。また、外部機関とも情報共有を密に図り、指導に生かすことができた。		B	・保護者アンケートの結果	コロナ禍で対面しながらの会話等が制限されている中、学校として発信すべき情報を、管理職や生徒指導主任が中心となり精査する必要がある。
		⑤ 関係諸機関との連携	児童の健全な成長のため、関係機関との連携を図っている。	校務分掌の各担当が窓口になり、迅速に関係機関と連絡を取り合い、保護者からの信頼も得ることができた。		B	・関係機関との円滑な連携	学警連携制度等を生かしながら、外部機関による出前講座等の規格の充実を図ってきたい。
		⑥ いじめの問題について	・いじめへの対処方針や指導計画が明確である ・日頃よりいじめの実態把握・早期発見に努めている	「奈良市立済美小学校いじめ防止対策基本方針」や「いじめ対応マニュアル」、アンケート後の対応の流れの見直しを行った。また、職員会議や生徒指導部会の場を通して、教職員にいじめアンケート後の対応や流れについて周知することができた。		B	B 本校独自の「いじめ防止対策基本方針」や「いじめ対応マニュアル」を見直し、行動計画を明確にする。	今年度、いじめアンケート後の対応の流れを見直したが、いじめ判定について更に見直しが必要ではないかという意見が職員から挙がっている。学年内での情報共有も図りつつ、いじめ判定が適切に行えるよう次年度に向け、生徒指導部を中心に意見を固める必要がある。
	・各学級の状況を学校組織として共有できている	月1回の生徒指導部会での情報共有を中心に、各学級の状況を学校組織として全体で共有することができた。また、職員会議や生徒指導部会がいじめアンケートの集計結果を共有することで本校のいじめの実態の把握を図ることができた。	B	児童17⇒肯定91%:A 保護者13⇒肯定90%。そう思うか40%:B	児童の回答で肯定的な割合は91%と昨年と変わらなかったが、保護者の回答で肯定的な割合は90%と昨年の87%より上がった。肯定的な割合の高さは、信頼度の高さの現れとして捉え、100%を目指し、児童だけでなく保護者とも日ごろから信頼関係を築けるようにしたい。また、せいびトークを上手く活用し、今後もいじめの早期発見に努める。			
	・組織的に迅速に対応する体制が整備されている	学期毎のいじめアンケートでは、実施後すぐに学年での情報共有の上で「いじめ対策校内委員会」を招集し、いじめ認定を行った。また、重大ないじめ事象については、情報の入手後すぐにいじめ対策校内委員会を招集できるよう委員会のメンバーを厳選することで、迅速に対応することができた。	月1回の生徒指導部会での各学級の情報共有だけでは、学校組織として各学級の状況の把握や共有は不十分だと感じた。養護教諭や各学年内や他学年の担任とも連携をとりながら、いじめ対応教員や生徒指導主任を中心に各学年・学級の状況把握に努めたい。	B	生徒指導部会を中心に、各学級の状況を学校組織として把握・共有する。		いじめアンケート実施後の日程表を予め提示することで、見直しをもってアンケートからでてきた事象への対応ができたと思う。実施後の流れが教職員に定着するよう引き続き、日程表の作成を行いたい。	
	① 組織的なキャリア教育	・年間計画を作成し、学年のつながりを意識し指導をおこなっている。 ・係活動、清掃活動、せいびの時間、勤労生産活動、縦割り活動、学校行事等の体験活動の指導をしている	キャリアパスポートを作成し、児童が自分自身を見直す機会を作ることができた。アンケート結果には「肯定的」が高い割合を示したと考える。	B	B 職員5⇒肯定的93%。そう思うか53%。 職員27⇒肯定的93%。そう思うか32%。		「肯定的」の割合は高いものの、「そう思う」の割合は高くない。キャリアパスポートを実施しているがコロナのため他校との情報共有が十分ではなかった。年間計画を立てる際に、キャリアパスポートに綴じる単元を考えることで教員自身が意識するように改善を図りたい。普段の授業の中でキャリア教育を意識して指導したり、振り返りを行ったりする必要がある。	
	② 家庭・地域社会との連携	・地域探検、商店、工場、伝統産業等の見学活動の指導をしている	コロナ禍で学校行事が制限される中、行き先を変更して学年毎に見学活動を実施することができた。		B	コロナ禍で多くの方と関わる活動が制限される中、引き続き家庭や地域と連携して見学活動を続けていく方法を考案していく必要がある。		

令和2年度 学校自己評価書

404

済美小学校

印

404済美小学校

大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善策
I 教育活動 に関するもの	(9) 特別支援教育	① 特別支援学級での指導方法の工夫・改善	・児童一人一人の教育的ニーズを把握し、個別的教育支援計画や指導計画を作成し、合理的配慮に留意して適切な支援を行っている。 ・研究授業や公開授業を通して、指導内容を工夫している。	・通常学級で支援を要する児童について個別的教育指導計画を作成し支援の手立てとした。特別支援学級、校内通級児童は、個別的教育支援計画と個別的教育指導計画をたてその児童に応じた支援や指導を行うことができた。	A	職員28⇒肯定的な意見100% うちA=73%A 職員29⇒肯定的な意見97% うちA=73%A 職員30⇒肯定的な意見100% うちA=71%A 職員35⇒肯定的な意見93% うちA=48%B	定期的に校内委員会を行い一人一人の児童の困りや対応等の実態報告をして情報共有し、必要に応じて教員の支援体制を検討し協力体制を今後も継続していく。そして、児童の実態に応じて臨時校内委員会やケース会議を開き、指導や支援の方向性について話し合うように進め、ケース会議で話し合ったことは全体に報告し共通理解を図る。
		② 家庭との連携	・必要に応じて連絡帳や懇談・家庭訪問を行い、児童の実態や支援について保護者との共通理解を図っている。	・特別支援学級では毎日の児童の様子を連絡帳で知らせたり、送迎時に話したりして保護者との連携に努めた。また、個人懇談会を年4回実施し支援内容等の共通理解を図ることができた。・ことばの教室では、年2回個人懇談会を実施し指導目標や指導内容等の共通理解を図った。また、「連絡ノート」を作成し日々の指導内容について保護者、通常学級担任に知らせることによって、3者で連携し通級児童の指導・支援に当たることが出来た。		職員32⇒肯定的な意見100% うちA=70%	今後も支援が必要とする児童に適切な支援ができるように、懇談や様々な機会を通して児童の様子や保護者の思いや支援について保護者と共通理解ができるように努める。
		③ 関係機関との連携	・児童の実態を的確に把握し、必要に応じて校外の関係機関と連携をとりながら支援を進めている。	・入級児童のケース会議では、市教委、医療関係者、保護者等との連携を重ね支援に当たることができた。・入級予定児童や6年生児童については、市教委、特別支援学校、在籍園、進学希望中学校、不登校支援対応者、保護者とケース会議を開催し入学後や中学校進学後の適切な支援について検討した。		職員33⇒肯定的な意見100% うちA=80%	スクールカウンセラーには、校内委員会やケース会議に関わってもらえるように調整をしている。
		④ 啓発と理解	・学校だよりや学年通信で本校の特別支援教育についての情報を発信している。 ・なかよし交流会・人権を確かめ合う日の取り組みなどを通して、支援を要する児童への理解を図っている。 ・学級指導や学級懇談会を通して支援を要する児童への理解を図っている。	・せいび学級だよりやことばの教室だよりを配布し特別支援教育の取り組みを知らせることができた。また、全保護者に小学校における特別支援教育理解の文書を新しく作成し配布することができた。・人権を確かめ合う日のビデオ発表を通して全校児童へせいび学級児童についての理解を図ることができた。人権教育部と連携し、ことばの教室の紹介や特別な支援を必要とする児童についての理解授業を行うことができた。		職員34⇒肯定的な意見93% うちA=63%	本校の特別支援教育理解の文書や教育相談案内文書を配布し、保護者へ理解と啓発を促すよう努める。また、懇談会や学校だより、ホームページで情報発信に努める。学級指導や学年が計画するなかよし交流会を今後も実施し、通常学級とせいび学級児童の交流を図る。通常学級に在籍する児童でも支援が必要な子どもがいるので、わかりやすい指導方法を共有していきたい。学校全体の特別支援教育にかかわる取り組みを学校だよりやホームページで発信していきたい。
II 学校経営 に関するもの	(10) 体力向上推進	① 体力向上推進計画の立案	児童の実態をもとに、体力が向上するように年間計画を作成する。	コロナウイルス感染症に対応した、指導計画を学期ごとに考えて、状況に応じて実施することができた。	B	B 年間指導計画を作成し、実施する。	次年度もコロナウイルス感染症対策をしながらの授業が予想される中で、年間指導計画を見直す必要がある。
		② 体育的行事	目的を明確にしなが、行事を行う。	マラソン月間や縦割りのスポーツ大会を計画し実施できた。		B 体育的行事を計画的に運営する。	コロナ禍で体育的行事が制限される中で、実施の方法や内容を見直していきたい。
II 学校経営 に関するもの	(1) 組織運営	① 学校経営目標・方針	校長は自らの教育理念や学校経営についての考えを明らかにしている。	・学校経営目標や学校経営方針を校長だよりやコミュニティスクール、ホームページ等で示すことで方向性を明らかにし、全教職員や地域に浸透することを心がけた。	B	A	・次年度も学校経営目標や学校経営方針を校長だよりやコミュニティスクール、ホームページ等で示すことで方向性を明らかにし、全教職員や地域に浸透することを心がけた。
		② 会議の運営と位置づけ	職員会議や各種会議が、職員間の共通理解・情報交換・課題検討の場として機能している。	今年度は、感染症対策などで意思統一が必要な場面が多かった。定例だけでなく臨時の企画会議も行き、スピーディーに意見交換を行うことができた。		B 教員39⇒肯定的100% A=69%	次年度も会議を定期的に行い、意見交流を活発にすることでよりよい学校経営に繋げていく。
		③ 働き方改革の実施	仕事内容の見直し・行事の精選・校務支援システムの活用など行っている。	・教職員全体で働き方改革に向けてどのような取組ができるのか、又教職員個人個人での工夫に向けて取り組んでいる過程である。・今年度は、コロナウイルス感染症による臨時休校やChromeBook導入等での新しい取り組みに多くの時間がかかり、働き方改革実施とは逆行してしまう部分もあった。		C 職員52⇒肯定的な意見73% うちA=30%	次年度も今年度に引き続き、学校全体で仕事内容、行事等の精選を考え見直しを行う。また、教職員一人一人の働き方改革に対する意識を高めることで働き方改革の実施に繋げていきたい。
(2) 研究・研修	① 教員の資質能力向上を目指した組織的・計画的な校内研修の実施	・三推進委員会や各教科・領域の部会が機能的に活動している。	三推進については部会を設けたことでそれぞれの部が機能していた。	A	A 職員9⇒肯定的100%,A79%	教科・領域については、今後、時間を設けて、より系統性のあるものにしていく。	
	② 授業改善を目指した授業研究の実施	・各学年1本の研究授業と研究協議を実施し、オープン授業を積極的にやっている。	本年度はコロナの影響で各学年部で1本ずつになった。また、プチ公開という形でオープンな授業を3本実施できた。		A 職員10⇒肯定的100%,A93%	来年度は各学年1本の研究授業・協議を持つ。また、プチ公開という形で全教師の公開を目指したい。	
	③ 校外研修内容の報告や伝達	・三推進委員会での協議内容などや外部での研修成果を共通理解している。	コロナの影響で校外での研修の開催がなかったが、自己研修の成果という形で新しく買ったchromebookの研修を数回開催できた。		B 職員11⇒肯定的92%,A59%	来年度についても校外での研修はわからない。しかし、本年度も行ったような自己研修の成果を全体に広げるという形のプチ研修を多数設けていければと思う。	

令和2年度 学校自己評価書

404

済美小学校

印

404済美小学校

大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善方策		
Ⅱ 学 校 経 営 に 関 す る も の	(3) 安全管理	① 学校安全計画の立案	・学校安全計画を立案・作成し、交通安全・防災の両面から安全が確保できるようにしている。	今年度も安全計画の見直し・立案・作成した。	A	保護者15→肯定94% うちAは50%	来年度も引き続き、安全計画の見直し・整理をして、この体制を維持していく。		
		② 学校防災計画の立案	・災害発生時に対応する学校防災計画を立案・作成し、それをもとに避難訓練、引渡し訓練を実施している。	火災・地震を想定した避難訓練では、事前に避難までの流れや、避難完了の際の報告の仕方などを共通理解し、実施した。引き渡し訓練は実施できなかったが、引き渡し方法を会議等で共通理解をした。		保護者16→肯定99% うちAは72%	実際に災害が起きた時にしっかり対応ができるようにするために、訓練の内容は反省・見直しを行いながら、来年度も取り組んでいきたい。		
		③ 危機管理体制の整備	・緊急時における学校の体制を整えている。 ・校舎内外と遊具の安全点検を行っている。	不審者対応訓練では、昨年度行った役割の細分化に乗った訓練を行った。不審者対応マニュアルの作成も行った。毎学期・毎月の定期点検を実施した。		職員43→97% 児童20→98%	不審者対応マニュアルについて、訓練の反省をもとに見直しを行う。来年度は早い時期での実施を検討する。		
		④ 安全指導の工夫改善	安全指導の充実を図り、児童の安全に対する意識を高めている。	コロナ禍のため活動の制限はあったが、交通安全教室、登下校指導、避難訓練の中で、自分の身を守るための行動の指導を行った。		児童21→96% 児童22→98%	子ども安全の日、避難訓練時など、定期的に児童の登下校の仕方についても継続的に指導・見守りをし、さらに児童の安全に対する意識を高めたい		
		⑤ 家庭との連携	家庭・地域との連携をとりながら、登下校時の安全を図っている。	家庭・地域子ども見守り隊・ならまち交番に下校時刻を知らせ、多くの目で見守りができるように努めた。地域子ども見守り隊の方々には、毎日登校の見守りをしていただいている。		A	地域子ども見守り隊の方の活動の様子・交番の方との連携など	来年度も下校時刻についてお知らせをしたり、地域・家庭の協力の下、登下校の安全を図りたい。	
	(4) 保健管理	① 学校保健計画の立案	学校保健安全年間計画を立案・作成する。学校医・各機関との連携をとりながら学校保健を進める。	感染症対策のため、計画通りに実施することは難しかったが、学校保健安全計画を立案作成し全教職員の共通理解を得ながら保健活動・安全活動を実施できた。	A	A	学校保健安全計画を立案・作成する。	学校の健康課題を踏まえた計画となるよう児童の実態把握をした上で計画の立案に参画する。	
		② 心のケアや健康相談の体制の整備	児童の欠席や保健室来室状況をもとに、身体面・精神面での心のケアができるように担任と養護教諭、関係教職員との連携を密にする。	身体面・精神面で不調を訴える児童については、担任はじめ関係教職員・SCと情報交換し連携をとりながら支援することができた。必要に応じて個別の健康相談を継続的に行い課題解決を図った。		A	毎朝の健康観察や保健室来室状況などで気になる児童については、担任・学年・専科・管理職と連絡を取り、迅速に対応できるよう連携する。	児童の課題を明らかにし課題解決に向けた目標を担任と情報共有しながら対応することを継続する。	
		③ 健康観察、健康管理能力の育成	定期的に保健指導を実施し、児童の健康管理能力の育成に努める。	身体測定と併せた保健指導は感染症対策のため実施できなかったが、児童保健委員を通じた啓発や保健だよりの発行を行い健康教育を行った。健康上課題を有すると考えられる児童に対しては、個別の保健指導を行い自己管理能力の育成に努めた。朝の健康チェック、健康しらべ、保健室来室記録による健康観察を行い、情報共有・迅速な対応を行った。		A	B	朝の健康チェックや、保健室来室記録・健康しらべの記入により児童の身体・生活状況を把握し担任と共に情報交換しながら対応する。	来年度は感染症対策にも配慮しつつ、児童が自立的に生活出来るように継続的に保健指導に取り組むたい。
		④ 学校給食の衛生管理	日常衛生点検を実施し、衛生に留意した指導を実施する。	毎日給食前後には全児童が手洗い・消毒を行い、給食当番の児童は衛生点検も行った。日々の体調管理・服装や手洗いなどの衛生チェックを行った。		A	A	毎日給食前後には全児童が手洗い・消毒を行っており、給食当番の児童の体調や衛生状態の確認を衛生点検表で再度毎日行う為。	児童一人一人が衛生を自主的に考えられるように図りたい。毎日の日常点検票で給食当番の児童の体調や衛生状態確認を行い、衛生について日々考えるように指導を続けていきたい。
	(5) 小中一貫教育	① 小中教職員の協働体制	小中一貫教育を念頭に置いて取り組んでいる。	夏の合同研修が中止になり、また、日常的な連携をとる機会もなくなり、今年度小中一貫の協働体制をとることができなかった。	B	B	職員49⇒肯定的93% A=41%	来年度、小中一貫実務者会議をどのような形で行うのかを一中三小で検討する必要があるのではないかな。	
	(6) 地域との連携	① 学校情報の発信	ホームページや便りを通じて、教育活動を保護者に伝えている。	日学校ホームページを更新した。また、毎月学校便り、学年便りを発行し、情報伝達に努めた。	B	A	職員44…肯定的な意見97% うちA=87% 保護者17…肯定的な意見98% うちA=70% 保護者18…肯定的な意見97% うちA=59%	これからもホームページや便りなどを通して教育活動を伝える。	
		② 幼・保との連携	スムーズな接続のため、連携に取り組む。	制限がある中、春日保育園、済美幼稚園の年長児と1年児童の交流活動を2回行った。交流を行うことで、お互いを知る良い機会となった。		B	B	園児の情報共有がしっかりできた。1年児童の学習活動に、よい効果があった。	来年度入学してくる園児の情報共有をすることができた。また、1年生の児童にとっては、小さい子の面倒をみることで、自尊感情を高めることができた児童もいた。
		③ 地域教育協議会との連携	協議会をはじめ、その他諸団体との連携につとめる。	少年指導協議会で学校での児童の様子を共有するなど、地域との連携を進めた。		B	B	保護者3…肯定的な意見95% うちA=45% 職員45…肯定的な意見100% うちA=66%	引き続き地域と密接に連携をとっていきたい。校区巡回の教職員の負担は減ったが、引き続き学校外での児童の過ごし方について指導していく。
	(7) 施設・設備	① 教育環境の整備	清掃・整理整頓をこころがけ、教職員全員で教育環境の整備に努める。	児童が進んで清掃活動をしている。教職員も一緒に体を動かしており教育環境の整備は進んでいる。	A	A	職員(46) 肯定的100% A=73%	学校を美しくという呼びかけは今後も続けていきたい。	
		② 施設設備の有効利用	施設や設備を把握し、備品を含め、有効に利用できるようにする。	みんなで使う場所について整理整頓が進み、大切に使うという意識も定着してきた。		A	A	職員(46) 肯定的100% A=73%	夏の職員作業を行うことができなかったが、みんなで使うものを日常的に整理することができている。引き続き声をこけていきたい。
		③ 施設設備の管理	施設設備に注意を払い、不都合があるときは速やかに適切に対応する。	昨年度の反省のもと、安全部を中心に定期的な点検を行った。		A	A	職員42⇒肯定的100% A=77%	もれ落ちがないように、今後も定期的な設備点検を続けていく。
	(8) 情報管理	① 個人情報の管理・保護	個人情報の取り扱いに配慮し、共通理解して個人情報保護に取り組んでいる。	年度当初に、ホームページや学校の便り、新聞、テレビ等への個人情報掲載について保護者の意向を尋ねると共に、ホームページへの写真の掲載に際しては個人が特定されないように配慮したり、作品掲示等に際しては、個々に同意書を得たりした。	A	A	職員48…肯定的な意見97% うちA=90% 保護者19…肯定的な意見99% うちA=61%	年度初めに個人情報の掲載に際し保護者の意向を確認すると共に、作品等の掲示に際しては個々に同意を得ていく。また、ホームページへの写真掲載に際しても、同意を得ていることを確認のうえ掲載するよう配慮していく。	